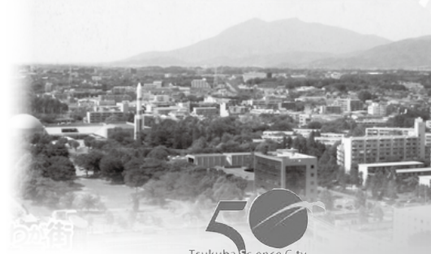

つくばよ、トップをめざせ
～学術研究都市（サイエンス・シティ）50年・筑波大学40年・TX10年…～

連載第5回

作家　高崎哲郎

筑波大学の創成する精神②～IMAGINE THE FUTURE～

「うらやましい限りだ」。私は筑波大学のキャンパスを散策しながら何度つぶやいたことだろう。同大学のキャンパスは東西に約1㎞、南北に約4㎞。自然に恵まれた森のような広大なキャンパスは、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合せた面積の2・4倍である。首都圏にある大学の狭苦しいキャンパスを見慣れた私からすると何とも羨望の念を押えきれない。都会のやかましい騒音もなく木々の緑に囲まれて空気は澄んでいる。広いキャンパスにひときわ目立つのが、陸上競技用のグランド、人工芝のサッカー場、ラグビー場、野球場、テニスコート、それに巨大な中央体育館や柔道場・剣道場・水泳プールをはじめとする屋内体育館の数々…。

筑波大学を語る時、体育専門学群を避けるわけにはいかない。むしろ優先して語るべき学群の一つであると私は考える。同学群は全国の国立大学の中で唯一「スポーツを科学する」専門学群（学部）として異彩を放っている。（教育学部に体育学科をもつ国立大学などは少なくないが、体育専門学群（学部）として独立した学問分野をもつのは筑波大学だけである）。男女学生は1学年定員240人で、全国の有名進学校出身者が少なくない。

全国の有名進学校出身者が少なくない。単にスポーツに優れているだけではなく、大学生としてスポーツに優れているだけではなく、大科学的な研究成果を活用しながら、優れた運動機能と幅広い運動経験をもち、かつ保健体育に関する総合的知識を備えた指導力と活力に富む人間性豊かな指導者の育成を目指す。卒業後は保健体育の教師や企業への就職の他、大学院体育学専攻（定員120人）に進み体育学の研究者・大学教官や高いレベルの指導者を目標におく男女学生も多いのである。（『筑波大学概要』）。学生たちは明るく大変礼儀正しい。（以下の記述（数字など）は平成26年5月現在である）。

◇

私たちの大学は、スポーツだけ優れている、〈いわゆる体育会系〉的学生は必要としません。そうした学生には私大の体育学科に進むことを勧めています。スポーツを科学する能力や精神のない学生は入学してもついてこられないでしょう」

同学群の准教授（複数）は自信に満ちた口調でこう語った。スポーツと学問の両立を目指すのである。同学群の歴史と伝統はゆうに1世紀を超える。単に歴史と伝統を誇るだけではない。100年余りの間に多くの傑出した人材（オリンピック選手やプロスポーツ選手）を輩出し、国内はもとより世界大会などで驚嘆すべき結果・実績を残しているのである。世界に知られたスポーツ指導者も少なくない。女子学生の活躍が目立つことも注目に値する。著名なOBやOGを挙げだしたらきりがないので、具体的な名前は記さないこととする。（一つの例をあげる。サッカー部（蹴球部）選手のブルーのユニフォームには胸にクッキリと「Since 1897」と書かれている。1897年は明治30年である。日清戦争勃発から3年目の年である。同部は前身の東京高等師範学校以来130年もの伝統を誇っているのである。同大から著名なサッカー選手をはじめ監督・コーチなどの指導者が多数輩出されている。いちいち挙げれば際限がない。体育教師として名もない地方の高校を全国有数のサッカーチームに育てたOBも枚挙にいとまがない。「日本のサッカー界は筑波大学OBが支えている」との評価も聞くのである。「なでしこジャパン」で活躍する3人の著名な選手がいるのもよく知られたことだ。男子サッカー（蹴球）部に比べて20年ほどの歴史しかない女子サッカー部は、昨年度インカレで準優勝の快挙をなしとげた。国立大学ではかつてない栄誉である）。

筑波大サッカー場（数多くの名選手を生んだ）

サッカーは一例に過ぎない。体育学群の学棟の廊下に沿ってガラスのショーケースがある。中をのぞき見て驚きを押えられない。筑波大学がこの40年間に全国や関東地方の競技会・インカレなどで獲得した優勝のトロフィーやタテさらには表彰状の数々である。リボンに飾られた光り輝くトロフィーやタテは数えきれないが、ゆうに50個は超えるだろう。半世紀に満たない40年間に、これだけの優勝や好成績を重ねたのである。バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー、柔道、剣道、陸上競技…（いずれも男女とも。順不同）。

名だたるメダリストたちを育てたグランドやピッチそれに体育施設は実に充実している。日本の大学にはなかなか見いだせない「スポーツの殿堂」と言っても決して過言ではないだろう。開学の祖嘉納治五郎の「文武両道」の精神が今日に継承されているというと誇張になろうか。しかも、その精神や活動は広く学外にまで開かれている。土曜日や日曜日になると、つくば市内と周辺の幼稚園児や小中学生が、グランドやピッチ、柔道場などにユニフォーム姿で現われる。大学生や大学院生から直接専門的な指導を受ける。「スポーツ指導者になるための社会貢献です」。学生たちは笑顔をつくりながら語る。取材を続ける中で、「開かれた大学」を高く掲げる同大学が学問・研究の「社会・地域貢献や還元」を重視していることを知った。

〈筑波大学体育系、体育・スポーツ指導者の倫理宣言〉はスポーツ・エリートの凛々（りり）しい姿勢を明確にする。

1、個人の尊厳と人権を尊重します。
2、暴力行為を根絶します。
3、ハラスメントを防止します。
4、ドーピングを防止し、薬物濫用を根絶します。
5、安全を確保し、事故防止を徹底します。
6、規範を遵守し、倫理観の醸成に努め、積極的に行動します。

◇

体育専門学群に隣接して芸術専門学群がある。このキャンパス一帯は二つの学群合わせて「体芸エリア」と通称される。芸術学群も同大学ならではの伝統と実績を誇っており、日本を代表する芸術家を多数輩出している。「美」を追求する芸術学、美術、構成、デザインの4つの分野がある。だが音楽と演劇のコースがない。残念である。（芸術専門学群の中でも極めて珍しい）。

この授業プログラムは2004年に文科省「特色GP」との教育改善・改革を目的とした支援政策に筑波大学の教育案が選ばれ、「アートやデザイン教育における3C力の育成」教育プログラムとしてスタートし、定員は1学年100人で決して多くはない。過半数を女子学生が占めるのも他の学群には見られない特徴といえよう。少数精鋭の専門教育である。毎年2月に茨城県立つくば美術館でその年度の卒業生全員による卒業制作展を開催する。プロの芸術家の作品と見まがう個性豊かな傑作や大作が少なくない。『筑波大学概要』は言う。

「広い視野と確かな基礎学力を持ち、柔軟な発想力と表現力を備えた美術・デザインに関する専門家の育成という本学群の教育目標は、それぞれの学生の4年間の学習成果となって卒業制作展に結実します」。優秀作品には筑波大学芸術賞や茗渓会賞が贈られ一部が大学に収蔵される。

同学群のユニークな実践的教育プログラムに「adp」がある。（以下、芸術系建築デザイン科貝島桃代准教授の助言をいただいた）。ブックレット『adp12』（発行者柴田良貴（同大学芸術専門学群長））を参考にし、適宜引用する。同誌によれば、「adp」とは"Art Design Produce"の略称で、「アート・デザイン」を通して、物事やそれに関わる人をプロデュースしていく同大学ならではの授業の一つで、学群1年生から4年生、大学院生まで参加する学群あげての授業である。（1年生から大学院生まで一緒になって研究テーマに取り組む授業は全国の大学の中でも極めて珍しい）。

この授業プログラムは2004年に文科省「特色GP」との教育改善・改革を目的とした支援政策に筑波大学の教育案が選ばれ、「アートやデザイン教育における3C力の育成」教育プログラムとしてスタートし、

longa.vitabrevis)」（ヒポクラテス）である。

4年の推進期間を終えた後も大学の授業として独自に継続させ、10年近くが経っている。ここでいう3Cとは Communication, Collaboration, Cordination（意思伝達力、共同・協調力、調整能力）である。この3C力を問題の発見から企画、デザイン、制作、運営、評価という一連の流れを学生自身が体験・実践することで習得してもらうことを目的にしている。学内だけの活動から、今や地域社会と連携した活動にまで活躍の場を広げている。いずれも知的で創造的で美しく楽しいのである。若者らしい斬新さとチャメッケ（遊び心？）に溢れている。

◇

学生グループの実践ぶりを見てみよう。〈team ぷらたん〉（女子6人、男子1人、妖精1人（シャレ？）の活動は幅広いが、筑波大学附属病院の新病棟の創作活動を紹介しよう。平成24年（2012）12月末、同大学付属病院の新病棟「けやき棟」がオープンした。新病棟の1階ロビーを病院の暗いイメージから明るいイメージに変えようと、〈team ぷらたん〉は筑波実験植物園での制作作品（草木の拡大写真と大きなポスター）を展示することを計画した。テーマは「けやきから始まる命の連鎖」である。植物群のセンスあふれる写真とポスターで飾られた病院ロビーは、まるでモダンなアートギャラリーもどきである。重い空気の病院に居ることを忘れさせる。四季折々の植物群の写真が廊下壁面を飾るのである。病人のメンタルなケアを目指しているのだろう。

病院を舞台にした芸術活動では〈アスパラガス〉（男女学生12人）が突出している。彼らが掲げるモットーは「ホスピタブル・イン・ホスピタル」（病院で快適に）である。より具体的にはアートワークショップやアートイベントを通じて「病院の空気をおいしくすること」だという。なかなかうがっている。当初は筑波大学附属病院を活動の拠点としていたが、その後つくばメディカルセンター病院でも活動を始めた。性質の異なる2つの総合病院を舞台にしている。

具体例をあげてみよう。「カドまるウィーク」。コンセプトは「世界をまーるく、心もまーるく」である。「カドまるスコープ」と名付けたワークショップアイテム（独自に開発した半透明の小道具）を持って病院内を散歩し、院内の景色をまるく映すことで、病院で感じる張りつめた気持ちも丸くしたい、というものだ。メンバーが最初に病院見学を行った際、白い・静か・非日常・ひま・怖いなど、ネガティブな印象が強かった。それらを解消するにはどうしたらいいか。話し合う中で出た「病院そのものを変えるのではなく、病院の見方を変える」という発想から、この企画が生まれた。ワークショップ当日は「カドまるスコープ」を作った後、面白い景色をしながら〈アスパラガス〉と入院患者ら参加者で一緒に外来病棟を散歩した。参加者は進んで病院を歩き回った。ワークショップの意図は確実に参加者に伝わった。

「病院で巨大すごろく大作戦」。小児科に入院しながら訪問学級に通う子どもたちと一緒に、訪問学級へ続く廊下に自分が入って遊べるくらいな巨大な双六を作るという企画である。訪問学級の学習支援のボランティアをしている学生のほか、医学生数人と〈アスパラガス〉がコラボレーションして企画を練り実施した。参加した子どもたちは、大人でも抱え込むほどの大きなサイコロを振って元気に遊び、笑顔の絶えない時間を過ごした。「病院、大嫌い」から「病院、大好き」の子どもたちが増えてしまいそう、である。

「研究室から飛び出せ」と言わんばかりのユニークな企画は「**稲敷市お弁当作りプロジェクト**」であろう。メンバーは建築デザイン系の男女学生たちである。同大学では茨城県稲敷市（つくば市から東南に約20㎞、利根川下流べりの田園都市）との共同研究で「まちづくり」に取り組んでいる。稲敷市の食文化を知ることで「稲敷市ならではのお弁当を提案する」との目的で活動している。稲敷市ではいくつかの「食」に関する課題に直面している。一つ目は人口減少により農業の担い手が不足していること、二つ目は数多くの農作物に対して加工食品が少ないため同市の味

巨大すごろく作戦（筑波大付属病院を明るく楽しく、『adp21』より）

青木彰名誉教授
（「青木塾」主宰、ジャーナリストを育成、『筑波大学』より）

を広範囲にPRしにくいことが挙げられる。このような状況を打破するために出されたのが「お弁当」である。お弁当に地域の特産品（レンコンなど）を詰めて人々が一緒に食べることで、その土地の魅力を楽しみながら知ってもらうことができる。またそこから生まれた自然なコミュニケーションも期待できる。

「お弁当を作り、稲敷市内外の人々に食べていただき、それによって稲敷市の特産品をふんだんに使った料理レシピ、農家の営みと食文化が人々に知れ渡る。最終的には食材を作る人と食べる人のつながりができる。このような過程で人が集まってくる。これがこのプロジェクトの最大の狙いである」（ブックレット『adp12』）。持続性を持つお弁当を提案している。若者の食文化を通じて地域に溶け込もうとする「チャレンジ精神」を大いに讃えたい。

◇

ジャーナリズムの世界で働き、ジャーナリズムを研究している私としては、総合大学・筑波大学におけるジャーナリズム教育やその実践に関心を持たざるを得ない。「青木彰記念講座（ジャーナリズムとメディアの現在）」は大学の授業として大いに評価に値する。極めて実践的であるからだ。記念講座の原点が「青木塾」である。

「筑波大学新聞」も建学以来40年間続いている。学生新聞とはとても思えない高いレベル（内容や編集）を保持している。（『筑波大学』（AERA）や同大『未来構想大学講座』などを参考にする。

亀谷賢客員教授のご協力に感謝する）。

「記念講座」に冠された青木彰氏（1926-2003）は著名なジャーナリストであり、私も生前にお会いしたことがある。氏のプロフィールを略記すると、氏は産経新聞東京本社に記者として入社し社会部を中心に活躍した。社会部長時代には「小暴力追放キャンペーン」で同社初の新聞協会賞を受賞した。以後、論説委員、編集局長、取締役、フジ新聞社代表取締役を歴任して、1978年退職。筑波大学現代語・現代文化学系教授となり、以後現場体験を踏まえた研究活動を続けた。

1990年同大学退官後は「マスコミ界の重鎮」として活躍する。作家・故司馬遼太郎は青木氏の人物的魅力について著書『街道を行く・三浦半島記』の中で「お互いに若いころ、同じ新聞社にいた。この人が社会部デスクのころ、事件がおこると、事件そのものをこの人の大きな体と神経で浸しこむように覆い、音楽のようにさまざまな音色を出させるという、余人の真似がたい指揮をした」と述べている。

「記念講座」の開設経緯を『未来構想大学講座』から引用する。「かつて筑波大学に『青木塾』という集いの場があった。1978年、産経新聞取締役編集局長、夕刊フジ社長を歴任した青木彰氏が、筑波大学現代語・現代文化学系教授として着任。その前歴を知ったマスコミ志願の学生たちが、就職相談に押しかけたのが始まりで、青木氏は週に一度、彼らを自宅に招き、時事問題を論じたり、作文を講評するなどして就職試験に備えると同時に、後半は『酒盛り』を通じ、記者時代のエピソードや自身が体験した戦後史のさまざまな事件の裏話などを語り、社会に巣立つ直前の学生たちに相互啓発の場を作っていった。いつからか学生たちは、その集いを『青木塾』と呼んだ。青木塾は1990年に青木氏が定年退官するまでの12年間続き、延べ200人を超える学生を輩出し、マスコミを中心に現在様々な分野で活躍している」。師弟愛によりジャーナリズムに多くの人材を送り込んだのである。

「記念講座」の柱は①ジャーナリズムやメディア業界で活躍中のOB／OGが講師陣として週替わりで登壇する、②多彩な業界・業務に就く講師から学ぶことにより、最新のジャーナリズム・メディア業界の動向やメディア・リテラシーを幅広く多面的に学ぶ、③講師陣は先輩であり、大学生活とキャリア形成を結びつけるための参考になる。講師陣の肩書を列記すれば、日本経済新聞常務執行役員グローバル事務局長、講談社広報室長、LINE株式会社社長、電通部長、朝日新聞ゼネラルマネジャー補佐、産経新聞論説委員、NHK報道局チーフプロデューサー…。現役バリバリ、多士済々である。学生たちが知的刺激を受けないはずがないであろう。この他に同大学では関連科目として、①ジャーナリズム論Ⅰ・Ⅱ（比較文化学類）や②ジャーナリズム特別演習（社会学類）などがある。（「筑波大学新聞」については次号以降で論じる）。

（参考文献：『筑波大学　IMAGINE THE FUTURE　by AERA』（朝日新聞出版）、『筑波大学30年史稿』、『筑波大学の40年』、筑波大学発刊広報資料、つくば市関連資料など）

（つづく）。